

一般受託製造産業欄

産学連携開発を連打

山添隆・コスモビューティー社長語る

話題性ある素材提供に 通販市場 照準

部外品処方 へパリン 類似物質 クリームも 152品目に

化粧品OEM大手のコスモビューティー（東京、大阪の2本社制）の山添隆社長は9月7日（木）、東京・成増の東京本社で本紙のインタビュに応じ、9月中間期の見通しや今後の経営方針・事業戦略について縦横に語った（聞き手は川口副編集長）。



「前期3月期決算の売上高は海外の売上げが上振れした」と語る山添社長。

ハード・ソフト強化へ積極投資

9月中間期の見通しは、前期の3月期決算の売上高は、海外の売上げが上振れし、最終的に182億円で着地したと語る山添社長。

「前期の3月期決算の売上高は、海外の売上げが上振れし、最終的に182億円で着地したと語る山添社長。」

伸びを考えると、おそろしく目標の超過はクリアできているのではないか。――近年、貴社のセグメント別売上高構成比では中国の売上が存在感を高めている。また、前期は現地の輸入化粧品販売許可の厳格化の影響で、40億円（計画では45億円）と伸び切らなかったと分析しているか。

「中国においては、クライアントのニーズ、受注にいたる多ロジシングの状況なりのリアクションが非常に良い半面、許認可の影響が大きい。また、高いニーズが求められる通販化粧品市場において、優秀がハッキリす

ないで、素々と対応していくしかない。ただし、当社は中国国内も化粧品工場を持つている強みがあり、今後はクライアントの要望に応じて徐々に現地生産に切り替えていくという方針も調整している」

「国内化粧品市場を盛り立てるために通販をメインに強化していくという施策の中でスタートしたが、我々がプロシエクトと呼ぶ、1億円規模のクライアントを10件つくるプロジェクトだ。この中で集中的に強化しているのが研究開発。なかでも今年は産学連携を取り組む案件が非常に多い。産学連携では既にいくつかの非常に面白い素材が出来上がってきており、高いニーズが求められる通販化粧品市場において、優秀がハッキリする強い打ち出しの素材をクライアントに提供できると考えている」

「まず、産学連携については、近畿大学と共同で近赤外線カットパウダーの開発を進めている。既に一定の成果が得られており、クライアントにも提案を開始している。東京農業大学とは酒の発酵技術を活用した「呼吸する酵母」というコンセプトの素材を開発、これも徐々に案内を始めていく。徳島大学とは植物由来のフスタキサンチンの開発。同志社大学とは糖化とカルボニル化による皮膚の黄くすみを解決するような植物エキスの探索も進めている。その他、世界で最も深い海溝に棲息する深海リナア海溝に棲息する深海微生物のエキスを和歌山高専と連携して進めており、さらには和歌山高専は、古くから髪の毛にまつわる民間伝承が伝わる同校近く

の寺の土壌から得られるバクテリアを用いたエキス研究なども進めている」

「また、当社は医薬部外品について認証アイテムの処方ストックを有し、クライアントの商品にニーズにスピーディかつ柔軟に対応しているが、最近、非常にニーズ性の高い部外品の承認を取得した。それがへパリン類似物質が主剤のクリーム類だ。日本は医薬部外品として許可を持っている会社はおそろしく当社を含め非常に少なく、希少性の高い処方になっている」

「今春発表した、ベトナム・中国新工場建設を含めた今後の投資計画は、『ベトナム第三工場は既に着工し、来年の4月末には完成予定。延床面積は約1万5千坪で生産ライン数は10。一方中国では延床面積1万5千坪の第二工場を設計中、着工はおそろしく年内ギリギリになる。完成は来年の9月・10月頃で、最大24ラインの工場になる。国内工場においては、中に入管理予定。このほか、ナショナルブランドの受注システムもウェブ受注に全面切り替えし、人事関連の管理パッケージも期内に大幅リニューアルする予定だ」

「もう一つ、昨今のマンパワー不足という背景が当然あるので、現在、工場の自動化ラインや省力化ラインの増設に着手している。洗瓶工程の自動化やロボット導入、多モジュール型自動化ラインの導入など、今年は機械導入をかなり進めている。これと同時に現在、自前の機械設計とプログラミクにも注力しており、前述の自動洗瓶機は、社内設備課で設計図を書き、機械のプログラムも自前で完成させたものだ。機械の能力的にも申し分なく、今後もオリジナルな機械設備を増強し、マンパワー不足を解消する取り組みを進めていく。同時にこの取り組みは、我々のグローバルな拠点にも横展開していきたい」